

四世代家族の日常

梅月誠

「ちよっと、部屋が汚いじゃない！ 今から掃除機かけてあげるから、早く片付けて」
俺は漫画から視線を外し、母さんの方を見た。

「今ちよっどいいシーンだったのに、何だよ？ 掃除機かけてくれなくていいから」

俺だって目的を持って部屋を荒らしている。今、この部屋は俺にとって最高の仕上がりだ。勉強机から体を捻らして腕を伸ばすと、大抵の必要なものは手に入る。

学校の友達がおススメして渡してきたこの漫画。それなりに面白い。スマホで調べてみると、アニメ化が決定しているようだった。

「いつかゴキブリが出てきても知らないからね？」

ふんっ、と鼻息を鳴らすと勢いよくドアを閉めて出て行った。

そんな母さんを気にすることなく、俺は漫画を読み進める。

この家は、今年建てた新築だ。一階には母方のじいちゃんとはあちゃんが住んでいて、いわゆる二世帯住宅というやつだ。また、ひいばあちゃんも住んでいるので、四世代住んでいることになる。母さんは新しい家を綺麗なまま維持する、と掃除にいそしんでいて、俺の部屋の状態も細かくチェックするようになった。俺は、最初こそは新築だと浮かれていたものの、実際に住んでみるとデリカシーの欠片もなく今は頭を抱えている。急にじいちゃんやばあちゃんが俺の部屋に入ってくることだってあるのだ。じいちゃんとはあちゃんに小言を言われるほど、面倒な事は無い。

次のページをめくった時、どこからともなく紙が降ってきて、漫画の絵を塞いだ。

「何だよ」

その紙をどかさうと、俺は紙の端をつまんだ。

『高齢者から見た世界』

五年一組 宮下 奏太

誰が読めるか、というぐらい汚い文字だ。一応、書いた張本人の俺は読解することに成功した。一昨日、友達と思いつ話をしていた時、五年生の時の話になってプリントを漁ったことを思い出す。その時に、戻し忘れてしまったのだろうか。

漫画を一度閉じ、三年前に書いた俺の文を読み直した。接続詞はぐちゃぐちゃだし、何が言いたかったのかは何もわからなかった。

「これ読んだ先生、凄いな」

けど、はつきりと思いつ出した。

介護老人保健施設から介護福祉士の方が講師として来た時、分かったことを意見文としてまとめるという授業があり、これを書いたのだ。

「奏太。お昼ご飯食べるぞー」

「ほーい」

中学生は食べ盛りだ。お腹と背中が引つ付きそうだったのだ。やっと昼ご飯を食べることが出来る。

今日は俺の好物の唐揚げを揚げてくれたらしい。

「父さん、料理上手くなったな」

「だろ。やっぱ才能を持ってたんだよ」

「……」

褒めない方が良かった。すぐに調子に乗る。

掃除を終えた母さんも食卓に着き、全員がそろってから食べ始める。

かぶりつくと、中はまだ熱々だったので舌の先を火傷してしまった。

隣に置いてあったお茶を飲む。

「あ、あとこれ。下の階の方からの差し入れだって。朝貰ってたの忘れてたわ」

母さんが冷蔵庫からタッパを取り出し、食卓の上に置く。

「何だよ、これ」

言ったら悪いがお世辞にも美味しそうには見えない。れっきとした和食料理、だと思う。

「私が子供の時から時々食卓に出たの。……うん、美味しい！」

美味しそうに食べる母さんを見て、だったら少しだけ、と思った俺が馬鹿だった。

「っ、お茶！」

口にした瞬間、不味さゆえに顔がゆがんでしまった。

「お茶なら横にあるわよ」

勢いよく飲み干す。

「そんなにか？」

と父さんが箸を伸ばした。

駄目だ。それは致死量だ。

「うん、美味しいな」

当たり前のように口をもぐもぐさせている。お義母さんの料理だからと言って我慢している風でもなさそうだ。

腐った納豆（納豆はそもそも腐っているのか？）に野菜の皮をミキサーで混ぜ合わせたもの（食べた事は無いが）のような味がする。

「奏太は好き嫌が多いわね。このくらいは食べなさい」

俺のお茶碗に強制的に入れてくる。

何とか食べ終えた俺は、食器を下げて部屋に戻る。

舌にはさつき食べた料理の粘り気が残っていた。

いよいよ夏休みに入り、暑さが増してきた。窓を全開にし、扇風機とタッグを組んだ俺は暑さと戦っている。今はアイスバーも味方してくれているようだ。

「おーい、奏太。おじいちゃんが呼んでるぞー」

ラフな格好をした父さんが入ってくる。

「え？ 何で呼んでんの？」

「父さんに聞くなよ。ま、お義父さんは気まぐれな人だから。つて奏太！　アイスこぼれそう！」
「え？」

その瞬間、冷たい個体が俺の太ももに落ちてきた。

「あーあ、こぼしちゃった。母さんにばれる前にちゃんと拭いとくんだぞ」
呆れながら部屋を出ていく。

棒状になっているアイスは、最後の一口をどう食べればいいのか本当に困るのだ。
「もったいな……」

床に落ちたアイスを拾って食べようとした。

「奏太！　何やってるの！　汚いでしょ。小学生でもないんだし」

父さんはドアを閉めないまま出て行ってしまったようで、食べようとした俺は現行犯逮捕された。

ほとんど同じ間取りのはずなのに、ここまで変わるものだろうか。俺の家である二階は、キッチンの向かい側にダイニングテーブルを置いてその先にテレビを置くというどこにでもありそうな配置だ。しかし一階は、竹で編まれたようなマットを敷いて、ちゃぶ台を出し、ベランダからは蚊取り線香の煙を上げている。ちなみに、ソファは違う部屋に置いてあるようだ。

言い訳をして母さんから逃げてきた。

さっき部屋にいた時にした匂いの元はこれか、と一人で勝手に納得する。

リビングには、ひいばあちゃんとかばあちゃん、じいちゃんと全員集合していた。各々好きなことをしてい

たが、同じ空間を共有していることに温かみを覚える。

「ねえ、じいちゃん。俺の事、何で呼んだの？」

「奏太と買い物に行こうかと思つてな。夏休みで暇しとるじゃろ？　ショッピングモールにでも行かんか？　良いもん、買ってあげるよ」

学校から課題がたくさん出されているので、暇という言葉には領けないが物を買ってくれる事は素直に嬉しい。丁度ほしかったゲームのカセットがあるのだ。

「いいけど、二人で？」

俺の疑問に、横からばあちゃんが答える。

「それがね、ひいおばあちゃんも行きたいってゆうんよ。でもおじいちゃんだけだったら心配じゃけえ、奏太も連れて行けつて私が言つたんよ」

なるほど。何か買ってあげるといふ口実で釣られたのか。

「ふうん。まあ良いけど。何時出発？」

「何時つて……あつ、奏太、はよせんにゃ電車が行つちやうぞ」

時計を見て、じいちゃんが慌てだす。

「え？　電車で行くのかよ？」

「あつたりまえじゃろ。免許も返納したし」

「マジ？　いつしたの？」

「ちよつと前じゃ」

テレビで高齢者が事故を起こしてしまうニュースをよく見るようになったが、八十代や九十代の人の事であって、じいちゃんにはまだまだ先の事だと思っていた。まあでも、判断力なども低くなっていくのだろうし早いに越した事は無いだろう。

ここは田舎中の田舎だ。一つ乗り過ぐすだけで、次に電車がくるのは何時間後になるか分からない。都会ではないので遅れる訳にはいかないのだ。

「待つて、俺着替えてくるから」

周りが慌てるなか、ひいばあちゃんは優雅にお茶をすすっていた。

「ふう……何とか乗れた……」

電車の中に入って、やっと一息ついた。

電車に乗る前に、切符を買うところでもかなり手間取ってしまった、（俺が見ていない時にひいばあちゃんが間違えて子供用の切符を買ってしまったり、俺のカードに残高が無かったりと色々だ）駆け込み乗車に近いものとなってしまった。都会だったら数分後に来るから良いのだろうが、田舎は数時間後だ。一本逃がすだけで一日のスケジュールが大きく変更になる。だから本当に乗り遅れるわけにはいかないのだ。田舎も都会のように少し待てば電車が来るようにしてほしい。田舎で電車を使う人が少ないのは、自分が乗りたい時間に着く電車がいないからだ。多分。だから本数さえ増やしてくれば……という田舎っぺ男子中学生のリアルな心境である。

隣町のショッピングセンターまでは三十分ほど。電車の中は少し混雑していた。まばらに人が立っている。

「今日は人が多いな」

「だよな。珍しく席も全部埋まつてるし」

ひいばあちゃんは三十分も揺れる乗車内で耐えることが出来るのだろうか。

「あれ？ ひいばあちゃんは？」

隣にいたはずのひいばあちゃんがいなくなっていた。

俺が尋ねると、

「優先席に座ったぞ」

と指さした。

「そっか。良かった」

俺はひいばあちゃんの席の近くのつり革にぶら下がった。

電車の揺れる音だけが聞こえる。

「そっか。良かった」

小声で隣にいたじいちゃんに話しかける。

「ん？ どうした？」

「いくら混んでも、優先席だけは誰も座らないよな。けど都会に行った時、若い人も普通に座ってスマホつついてたからびっくりしたの思い出した」

現時点で優先席に座っている人はひいばあちゃんしかいない。

「優先席、と書かれてるだけで座りにくいしな。でも、健康な人は座るなという意味ではないじゃろ？ そ

この意味をはき違えたらいけないよな。譲り合う心を持ってということだよ。皆が親切に譲り合うことが出来るようになって、この席もなくなると良いんじゃないか？」

「何急に真面目な話しすんの？ 怖いんだけど」

大袈裟に腕を擦って見せる。

「話題を振ってきたのは奏太の方じゃろ？」

「はいはい。そうでした」

電車に揺られていると、山を抜け、きれいな海が見えた。

太陽の光が水面を眩しく光らせている。

今日は波が穏やかだ。そして今気づいたが、雲一つない晴天である。

「綺麗だな。景色は歳をとらないと綺麗だと思わないと聞いたことがあるんだが、奏太は綺麗だと思っ
か？」

「……別に」

そう言われると、綺麗だと思ったとは言えない。俺が爺臭いみたいじゃないか。

ひいばあちゃんも体を捻らせて車窓から見える景色を見ていた。窓枠が額縁のようになっていて一つの絵画のようだ。

「もうすぐ着くな」

自然が多かった景色から、建物が多く見えるようになった。

電車のドアが開くと、じいちゃんひいばあちゃんを連れてホームから出る。じいちゃんは方向音痴。ひ

いばあちゃんは最近、物忘れが多くなった。迷子になられると俺が困る。一応、何があっても大丈夫なようにひいばあちゃんにはGPSを付けているとばあちゃんは言っていた。じいちゃんはスマホを持っているので、まあどうにかなるだろう。

「ねえ、絶対俺についてきてよ？」

「分かるとるわ」

「もちろんよ」

その言葉を俺は全然信じられなかった。

「暑い……」

「じゃなあ。じいちゃんも、首がひりひりしてきたわ」

日陰を通りながら歩くが、アスファルトからは強い熱を感じた。

「あと、あともうちよつと……」

途中で買った水のペットボトルも心なしか温かい。ひいばあちゃんに至っては飲み終わっている。行く前もお茶を飲んでいたが、トイレに行かなくても良いのだろうか。

やっとショッピングモールの入り口に近づいてきた。人感センサーが反応して自動ドアが開いた。冷ややかな空気に包まれる。

「涼しー！ 天国か」

大きく息を吸って冷たい空気を体内に取り入れた。

「じゃあ！ まだどこかで！」

「は？」

「いやー。じいちゃん、個人的に気になるお店があつて。ちょっと行ってくる」

最初にした約束は一瞬にして破られた。この家は自由人が多すぎる。

俺は哑然としてじいちゃんの背中を見送ることしかできなかった。

「奏太ちゃんは何を見に行きたい？」

「俺？ ゲームソフトとか……。でも先にひいばあちゃんが行きたい所ついてく」

ひいばあちゃんも流石に興味ないだろう。

「私もないだけどねえ」

少しでもひいばあちゃんの興味がありそうな所を考えた末

「だったらガチャガチャがある所行っても良い？」

という結論に達した。

「良いわよ」

ひいばあちゃんの歩幅に合わせゆっくり歩く。歩いていると、ガチャガチャが一面に敷き詰められた「ガチャガチャエリア」というところに着いた。

「あら、何？ これは？」

タッチパネルが取り付けられた画面をひいばあちゃんは押しまくる。

止めてくださいーい、と俺は止めに入った。

「これもガチャガチャだよ。スマホで決済できるタイプのやつ」

「へえ、そんなものもあるのね」

試しにやってみるか、とスマホを取り出した。

アプリを立ち上げ、タッチパネルの近くにスマホを近づける。

ガチャ、とカプセル達の中で転がる音がした。

「お、出てきた」

よくわからないキャラクターのキーホルダーだ。カプセルから取り出し、近くにあつたカプセル入れに入れた。

「これで買えたの？」

「そうだよ」

「すごいねえ」

他にしたいものがあつたらこれを使えと千円渡された。ガチャガチャに使う金額としては多い気がするが、ありがたく受け取ろう。

端の方にあつた両替機で百円玉に両替する。

アニメのガチャがあるコーナーに行き、お気に入りのアニメは片端から回していった。母から常に持っている、と言われていたエコバックが役に立った。出てきたものをエコバックの中に入れていく。

推しのキャラクターのキーホルダーが出て思わず叫びそうになったことは、ひいばあちゃんには秘密だ。

「ひいばあちゃんは本当に行きたいところはないのかよ」

「うーん、だったら花屋さんかしら」

「花屋さん……」

このショッピングモール内にあっただろうか。近くにあったマップを一枚とる。

「花屋、花屋……あつた。行く？」

「ええ。行きましょ」

ということ、次の目的地は花屋さんになった。

花屋さんに入るなんていつぶりだろう。

花の良い香りが鼻孔をくすぐる。

「何の花を買いたいんだ？」

「うーん、特に考えてなかったんだけど……」

考えてなかったんかい、と心の中で突っ込む。

「そうだねえ。だったら可愛い孫にでも花を買おうかしら」

「あ、そこはひ孫じゃないのね」

まあ俺だって花を貰っても困るのだが。

外は暑いので、花がダメにならないかが唯一の心配だ。

花用の冷蔵庫のようなものの中に並ぶ花々を一つずつ見ていき、あれがいいかしら、これがいいかしら、

と大きな独り言を喋るひいばあちゃん。俺は一つも種類が分からず、ただ見ているだけだった。

「ねえ、奏太ちゃん」

「ん？ 何？」

「あの花良いと思わない？」

ガラスを人差し指で優しく叩く。

「あの薄紫色の花？」

「違うわよ。白色」

「白お？」

ひいばあちゃんの指さす方向を見ても白色の花は見当たらな

「あっ」

その時思い出した。小学五年生の時、講師の方が来て話していたことをだ。

『高齢者と君たちでは見える世界が違います。例えばここに茶色と黒の色紙があります。君たちはこの色の違いがはつきりとわかりますよね。でも高齢者の方には同じような色に見えています。他にも綺麗な薄紫色。これが高齢者の方には白色に見えます』

今、起きていることがまさにそれだ。

この場合、白色の花として会話を進めるべきか、訂正し薄紫色の花だと伝えるべきか。

「……ねえ、ひいばあちゃん」

「なあに？」

「ドライフラワーなんてどうかな。最近流行ってるらしいし、水の手入れとかも要らないだろうし」
話題をそらすことが、今の俺に出来る精一杯だった。

「ドライフラワー……。今はあんな感じのが人気なの？」

「ま、まあそんな感じ」

嘘はついていない。

「だったらそうしようかねえ。奏太ちゃんはどうかが良いと思う？」

「あれとかは？」

「そうね、だったらそうしましょう」

決めたドライフラワーを持ってレジに向かう。

レジに打ち込まれた金額を出そうとひいばあちゃんが財布を出した。

「うわ、小銭ばっかじゃん」

取り出された大きめのがま口財布には、これでもかというくらい小銭が詰められていた。俺は、極力綺麗に出したい人なので一円まで数えて出すのだが。

五百円玉も大量に入っているので、小銭だけが支払うことが出来そうだ。

釣銭トレイに一枚ずつ出しているがそのスピードはかなり遅い。後ろに並んでいる人はいないし、店員さんも優しく待っていてくれるがやはり周りの目が気になってしまう。

ひいばあちゃんは、がま口財布をポシェットの中に戻すと、小銭で払うのを諦めて福沢論吉を取り出した。「ひいばあちゃん、俺払うよ。財布貸して」

すると、お札を入れている財布を渡してくるので、そっちななくてがま口財布の方、と付け足した。がま口財布を受け取ると、五百円玉を数枚取り出し、百円玉と十円玉も取り出して金額ピッタリになるようにした。

会計を終え、お店を後にしようとする俺たちに店員さんは話しかける。

「いいですね。曾孫さんとお買い物」

少し恥ずかしくなった。

行く先もなく、ただ店と店の間を歩く。

「ごめんね。小銭出すのが遅くて」

「別にいいよ。最近テレビの企画で小銭を出す速さを競うのがあるけど、ひいばあちゃんは負けそうだな」

「最近の小銭を出したら後ろの人待たせてしまうけえ、大きいお金しか出さんようになったんよ。そして小銭はどんどんたまっていくし……」

そりゃそうだろうね、と苦笑いした。

『高齢者になったら細かい指先の動きが鈍くなってしまうます』

……そういえば、そんなことも言っていた気がする。

「じいちゃん、どこにいんだろ」

「奏太ちゃん、電話してみたら？」

「そうだな」

ウエストポーチからスマホを取り出すとじいちゃんのスマホに電話をかけた。

ブルブルと三回ほど鳴った後、
『はい』

と、じいちゃんの間抜けな声が聞こえた。

「じいちゃん？ 今どこ？」

『それがなあ、よくわからんんじゃない』

「は？ 店内のマップとか持ってないの？」

『もっちゃん』

じいちゃんに聞こえないよう、スマホから口を遠ざけるとため息を漏らした。

「……近くに何のお店がある？」

『近く……本屋さんがある』

「あー、はいはい。探しに行きます」

電話を切ると、ひいばあちゃんに、

「じいちゃん、迷子だって」

と伝えた。

それを聞くと、ハハハと愉快そうに笑う。

ひいばあちゃん、あなたの息子さんですよ……。

「やっと会えた……」

動くな、と伝えるべきだった。フードコートで美味しそうにアイスを食べている。

「このアイス美味しいぞ。二百円渡すから、買っておいで」

「マジ？ 買ってこよー。ひいばあちゃんは？」

「お腹壊したらいけんしやめとくね」

「はい」

面白い味のアイスがたくさんあったが、俺は無難にバニラにした。他のアイスよりも安かったので追加でトッピングシュガーを乗せてもらう。

「じいちゃん、その袋は？」

席に戻ると、じいちゃんの膝の上に紙袋が乗っていることに気づく。

「これは、奏太へのプレゼント。今日付き合ってくれたしな」

「え、自分で選べるんじゃないの……」

「な訳ないだろ。ゲームとか漫画とかを頼まれるかもしれないだろ」

「うっ」

ゲームのカセットを買ってもらおう気満々だった。

となると、中身は嫌な予感しかない。

「ね、ねえ、中見てみても良い？」

「今？ まあ良いぞ」

紙袋を受け取ると、恐る恐る袋の中を覗いた。

「本に問題集……」

本屋の近くにいたのはそういうことか。

「この本、どつかで聞き覚えある賞を受賞してんじゃん」

「お、よく知ってるな。奏太の人生観が変わるかもな。ははははは」

「帯に書いてあるし、全然面白くないし。本でもラノベにしてくれよ……」

行きと同じように電車に乗り込む。今度はゆとりを持って乗車することが出来た。そのおかげで、三人とも座席に座ることが出来た。

「久々じゃな、こういうの。楽しかったな」

「そうだなあ。次はばあちゃんとも行きたい」

「今日は町内会の人と集まりがあつたんでしょ？ 次は予定をちゃんと擦り合わせていきましょうね」
建物の数がだんだんと減っていき、自然が目立つようになった。

今日、ひいばあちゃんと行動して高齢者への理解が少しは深まったのかな、と思った。ひいばあちゃんが小銭をたくさん持っている理由が分かったし、困っているときは助けてあげたいとも思った。少し前に『高齢者から見た世界』という俺の書いたポンコツな意見文が空から舞い降りてきたのは何かすごい力が働いていたのではないかもさえ考えってしまう。

……でも。色のよくわからないひいばあちゃんへの返事は濁したままだ。五年生の時、自分事としてちゃんと講師の方の話聞いていたら違ったのかもしれない。あの時は、訂正するべきだったのか。それとも、

ひいばあちゃんの世界観に合わせるべきだったのか。その答えはこれから大人になるまでにじっくり考えていきたい。正解は無いと思う。それに、間違いも無いと思う。今日、俺が取った対応も一つの方法だ。高齢者との接し方に、攻略法なんてない。お互いに良い方法を見つけ、実践する。これからどのように出来たら、と心から思った。

隣には、うつらうつらとしても、ドライフラワーは大事に抱いているひいばあちゃんがいた。

* 「ガチャガチャ」は株式会社バンダイの登録商標です。
* 「ガチャ」は株式会社タカラトミーアーツの登録商標です。

四世代家族の日常

令和5年10月12日

著 者 梅月 誠
発 行 者 鈴木 征浩
編 集 谷口 里穂
発 行 opsol book
opsol 株式会社 opsol book 事業本部
〒 519-0503
三重県伊勢市小俣町元町 623 番 1
TEL 0596-28-3906
FAX 0596-28-7766
MAIL info@opsolbook.com
WEB <https://opsolbook.com/>

本書の内容の一部、または全てを無断転載・複写・デジタル化・
アップロード行為は著作権法上の例外を除き禁止されています。